

ハワイ帰りの島民たち

——移民の島周防大島——

About People of Suo-Oshima Who Returned from Hawaii in
the First Half of the 20th Century

村上 和賀子

要 旨

山口県周防大島は、明治時代にハワイへ移民労働力として多くの島民を送り込んだ縁で、1963年、ハワイ州カウアイ島と姉妹縁組を結んでいる。1885年2月8日、第1回官約移民944人がホノルル港に到着したが、その3分の1に当たる305人が周防大島郡出身者たちで占められていた。ハワイ諸島各島に点在するサトウキビ農園に振り分けられた島民たちは、監督官の監視のもと、炎天下の苦役に耐え、劣悪な生活環境に甘んじ、故郷への郷愁に涙した心情を「ホレホレ節」の歌詞に託して生き抜いた。彼らがハワイでどのように働き、どのように暮らしてきたか、また出稼ぎに出た理由や帰国に至った経緯について、帰朝者たちの体験談をもとに検証する。

キーワード

周防大島, 出稼ぎ移民, ホレホレ節, ハワイ, カウアイ島

1. はじめに

周防大島は山口県東南部に位置し、瀬戸内海で3番目に広い面積の島である。2015年4月現在、人口17,871人、世帯数9,836となっており、柳井市大島と大島大橋によって結ばれている。600メートル級の山が連なり、海と山の環境に恵まれて、その豊かな自然により農業と漁業が発展し、みか

んやいりこ等の特産品を生んだ。また明治時代にはハワイへ多くの移民を供給した縁で、1963年（昭和38年）にハワイ州、カウアイ島と姉妹縁組を結んでいる。近年は「瀬戸内のハワイ」の掛け声と共に観光客が増え、新たな特産品も考案され、都会から移住する人たちが目立つ島でもある¹⁾。

周防大島が生んだ高名な民俗学者、宮本常一²⁾は、「瀬戸内海には比較的大きな島が三つあります。淡路島、小豆島、周防大島です。周防大島は屋代島とも言いました。地図を見ると金魚のような形をしています。大きい島ではあるけれど、平凡な島として、瀬戸内海について書いた書物の中にはほんのちよっぴり書かれるか、または全然書かれていないことがあります。外から見れば、これという名勝もなく、また歴史的な遺跡もないので、魅力を感じないのだと思いますが、これを内側から見ていくと、瀬戸内海の中ではもっとも活気のあった島の一つではないかと思います。……この島はすでに『古事記』などにも見えていますが、この島の人たちの活動が目ざましくなっていくのはずっと後のことで、18世紀の初めごろからです。そのころ、島でサツマイモが作られるようになります。それまではムギ、アワ、ヒエ、ソバなどを畑に作り、田には稲を作り、海岸では塩を炊き、また魚をとり、貧しい生活をたてていたようですが、サツマイモが作られるようになって食べるものが増えてくると、人が急に増え始めます。1740年ごろから1840年までの100年ほどの間に島の人口は2.5倍も増えて、6万人に達します。」と述べ、故郷の島を紹介している³⁾。

しかし6万もの人たちが働くほど、島には仕事がたくさんあるわけではなかったので、19世紀の初めごろから出稼ぎに行く者が増えていく。まず島の東部からは帆船の船子（水夫）として、島の中央部からは初めは木挽として、後に大工として出稼ぎに行くようになった。島の西部北岸からは石垣積みとして、山口県各地をはじめ北九州へ出かけて行き、西部南岸からは、山口県三田尻地方の塩田の浜子として働きに出かけた。また女たち

は、家で糸つむぎや機織りをするばかりでなく、山口県の山間地方の田植えや稲刈りに出かけて行く者や、女中奉公に出る者も少なくなかった。それでもなお島は貧しく、農業以外の仕事を島外に見つけて出かけて行くよりほかなかったのである⁴⁾。

ところが、1884年(明治17年)にハワイ政府から移民の募集があり、多くの島民が渡航費を借りて出かけて行くことになる。内地で働くより収入が2倍以上にもなると聞いて、島民は相次いでハワイに渡り、多いときは3,000人を超え、ハワイやアメリカへ渡った者は1万人にも達しただろうと言われている。1945年の敗戦後、島へ引き上げてきた者は、1万5,000人にのぼったと見られている⁵⁾。戦後、島の生活は苦しかった。その苦しさをどうにか切り抜けたのは、ハワイ、アメリカからの送金および物品による慰問であったと言われる。1945年から1955年までの10年間、島に送られてきた金員と物品は、推定で15億円にのぼったと見られる。それは同じ期間の島のみかんの生産額にほぼ匹敵する⁶⁾。

こうして島から海外に出た人々によって、島民は救われたと言っているが、たとえ食に窮し生活に困っても、故郷を捨てて異国ハワイに移住するという事は非常な勇気を要することである。1935年(昭和10年)官約移民50年祭に当たり大阪毎日新聞社のハワイ日本人座談会の速記の中から、精々堂商店支配人であり、日本人商業会議所会頭であった大島郡屋代出身の橋本万槌の談話には、「私は日本一の移民島といわれる山口県大島郡の生まれで、私共の郡では海外へ出る事を当たり前と考え、元気盛りの時にどこか海外に出て働いて来る事が一つの義務のようにさえ思われています。従って小学校の生徒でもハワイやアメリカがどの方向にあるかを知っている程多数の者が海外に出ています。……大島郡12町村のうち10町村はそれぞれ町村人会を組織しております。私の故郷屋代村人会員が最も多く、会員は百人近くおります。ピクニックを催しますと家族も参加し

て四・五百人も集まります。こういう有様ですから郷里にいるよりもハワイにいる方が心安く楽しいし、従ってハワイを永住地として楽しんでいきます。」と記されている⁷⁾。

本論文では、周防大島から島外や海外へ出て働くことが当たり前であり、それが元気盛りの若者の義務として受け入れられてきた島の歴史を踏まえ、1885年に始まった第1回官約移民の時代から1900年代前半に及ぶ長い期間、労働力としてハワイに渡った多くの島民が、それぞれどのような環境で働き、どのように暮らしてきたか、また出稼ぎに出た理由や帰国に至った経緯について、帰朝者たちの体験談をもとに検証する。

2. 海を渡った島民たち

1778年、英国人ジェームズ・クックがハワイを発見した当時は、約40万人の住民がいたが、米本国人と交通雑居するようになり、迷信の犠牲、酋長の圧制、過酷な刑律、流行病、不衛生な生活環境等の原因から、年々人口が減少し労働力不足を招いた。1850年、ハワイ王国農事会は、中国人の労働力を誘致することにしたが、中国人は永住同化の意志が不充分であったためあまり歓迎されなかった。日本人移民については、1868年(明治元年)153人が初めてオアフ島に上陸して、甘蔗(サトウキビ)の栽培に携わったが、劣悪な環境での労働を強いられた。1871年(明治4年)日布修通商条約が成立したが移民問題に触れられなかったことから、1881年(明治14年)カラカウア王が日本を訪問して移民の派遣を懇願したが具体的に事が進まず、1884年(明治17年)に至って漸く話が進んだ⁸⁾。

1885年(明治18年)2月8日、第1回官約移民944人を乗せて東京市(シティー・オブ・トウキョウ)号がホノルル港に到着した。この移民募集に対して全国から2万8,000人以上が応募し、選ばれた944人の3分の1に当たる305人が大島郡の出身者たちで占められていた。それは当時の外務大臣

が山口県出身の井上馨であったことに由来する。井上はハワイ出稼ぎ者たちを3年間の労働の後に帰国させることで、欧米式農業法を日本に輸入し、同時に外貨の獲得を期待して、最初の移民派遣に際して自身の出身地山口県での募集に力を入れたのである⁹⁾。また島民の中には大工や石工など腕のいい職人が多く、島を離れて島外に出稼ぎに行くことが珍しくなかった。そんな風土が移民を多く出した要因であるとも言える。労働契約は3年間で、それ以降は帰国するなり、ハワイに残るなり自由という契約であった。労働の報酬は男が一日15ドル、女が一日10ドルで、当時大工の月給が3円であったので、その5倍の収入になったと考えられる。移民とはいえ、多くの者は行って稼いで帰って来る「出稼ぎ」を考えていた¹⁰⁾。

ハワイに上陸した移民たちは、ハワイ諸島各島に点在するサトウキビ農園に振り分けられ、それぞれの地で石を積み上げて石垣を作り、サトウキビの葉を屋根に葺いて家を建てるところから始めた。ルナと呼ばれる白人監督官のもと、男たちがケーンナイフでサトウキビをひたすら刈り取り、女たちは刈り取られたサトウキビの枯れ葉を手で剥がすきつい作業を「ホレホレ」と呼んだ¹¹⁾。炎天下での苦役に耐えながら、誰からともなく歌われ始めたのが「ホレホレ節」¹²⁾である。その調子は広島・山口地方で糸を紡ぎながら唱う歌と同様であるとの説もある¹³⁾。一見シンプルな歌詞から、逆に移民たちの心の奥底に潜む複雑な心情を感じ取ることができる。

「ホレホレ節」より¹⁴⁾

ハワイ　ハワイと　ヨー

夢　見てきたが

流す　涙も　キビの中

今日のホレホレ　辛くはないよ

昨日届いた 里便り

ハワイ ハワイと 来てみりゃ地獄

ボースは悪魔で ルナは鬼 (ボース, 農園経営者)

横浜 出るときゃ ヨー

涙で 出たが

今じゃ子もある 孫もある

行こか メリケン ヨー (アメリカ人が訛った言い方)

帰ろか 日本

ここが思案の ハワイ国

条約切れても 帰れぬやつは

末はハワイの ポイの肥やし (ハワイ原住民の主食芋)

ハワイから戻ってきた移民たちは「ハワイ帰り」と呼ばれ、大邸宅を建てるなど、故郷に錦を飾る者もあった。日本ハワイ移民資料館¹⁵⁾も福元長右衛門がアメリカから帰国後に建てた邸宅である。福元は旧屋代村(現在の周防大島町西屋代)に生まれ、16歳で単身アメリカ合衆国、サンフランシスコに渡った。現地の家庭で手伝いをしながら学校に通い、その後、貿易事業で成功を収めた。1924年(大正13年)に家族とともに帰国し、1928年(昭和3年)に邸宅を建てた。木造瓦葺き入母屋造り2階建てで、建築費は当時約3万円を要した。現在の金額にすると3億円以上に相当する。柱や床に使用された木材は台湾の檜や屋久杉で、福元が自ら台湾で購入してきたと言われている。大島の石工により造られた石垣や、船大工による欄

間のある和風の建築であるが、天井が高く、窓には凝った模様が入ったガラスがあしらわれるなど、洋風建築の影響を受けている。台所には福元家が使っていたオープンや料理道具など、当時の一般家庭では見かけなかったものが展示されている¹⁶⁾。純和風の建築でありながら、内実が和洋折衷になっているのは、福元が慣れ親しんだアメリカの生活文化や様式をそのまま自分の暮らしに生かそうとしたからではないだろう。

一方ハワイに残り、または米国本土へ渡った人たちは「日系一世」となり、それぞれの地で働き家族を養って、二世、三世と子孫を増やしていった。周防大島にある神社の多くにハワイからの寄付があった。昭和初期にはいくつかの小学校へハワイからピアノが寄贈された。日本ハワイ移民資料館に展示してあるグランドピアノも1932年（昭和7年）にハワイの蒲野村人会が周防大島の三蒲小学校に贈ったものである。太平洋戦争後には、ハワイやアメリカ西海岸等に在住の日系人たちからたくさんの送金や物資による援助が寄せられた。日常的に差別を受け、戦時中は11万人以上の日系人たちが強制収容所に送致されながら、戦後も困難な状況にあった彼らが故郷のために送った救援は、15億円に達したと言われている¹⁷⁾。

3. ハワイ帰りの体験談

ハワイへ渡った移民の生活は一般化され一人ひとり大差がないかのように語られがちであるが、移住の動機、生活状況、給金、借金の返済や送金、故郷への郷愁、帰国の理由等、それぞれに異なっている。また移住した時期により、労働環境や暮らし向きについても変化が見られる。例えば、元年者時代（1868年～1884年）から官約移民時代（1885年～1893年）は、腰掛出稼ぎで浮動性が高く、出稼ぎ気質に支配され素行も修まらない傾向があった。私的移民時代（1894年～1899年）になるとハワイ在住の知り合いなどを頼って、同郷の者と共に移住する場合も見られた。さらに自由移

民時代（1900年～1907年）は、暫定的定住時代と考えられ、次第に定住する者も現れ、米国本土へ転航して教育を受ける者もあった。呼寄移民時代（1908年～1923年）は、家族の呼び寄せによる渡航が辛うじて可能な時代で、家族を形成することにより定住性が進んだことが理解できる。移民禁止時代（1924年～1946年）は、移民の新規入国が厳禁となっていたため、永住土着を決意せざるを得ない状況の時代であったと言える。戦後の帰化時代（1952年以降）は、日本人の米国帰化が始まり、相当数の日本人一世や戦争花嫁などが帰化したものと考えられる¹⁸⁾。

土井彌太郎の『ハワイ移民史』に載せられた移民の実話の中から現地での生活を具体的に探ることにする¹⁹⁾。

(1) 川本スエ（大島町横見，1865年2月25日生，1889年渡航）²⁰⁾

「当時毎年御上がハワイ移民を募集していた。ハワイに行けば金がうんと儲かるという話を聞き、私も夫の亀松（七歳年上）と金儲けに行くことを決めた。ハワイまでの船賃は御上が負担するが、その代わり三年間は苦しくても辛抱するという契約があった。前もって御上に願い出て、1889年（明治22年）に第八回官約移民として日本の船でハワイに向かった。船中、各人の奉公先が決められた。私共夫婦は知人とも別れてホノルルから歩いて一日ぐらいかかるワイナイという所で黍を作る農園で働くことになった。すでに日本人や支那人がいた。これらの人々と一緒に同じ住居で別々の部屋に暮らした。当時はまだ電灯がなくランプであった。毎朝一定の量の米を出しておくでコックが炊いて各部屋に配ってくれた。川辺にある棘のある木（キャベツリー）を燃料にしていた。

出稼ぎ人の主な仕事は黍作りで、水源地から黍畑に水を充てること、家のまわりの野菜作りなどの分担が決まり、女の人は給仕や、旦那（農園主）の家の子どもを育てることなどの仕事があった。最初私たち夫婦は黍畑で

働いたが、苗の植え付け、草刈りが主な仕事であった。特に苦しかったことや虐待されたことはなかった。畑の両端にルナ（監督官）がいて働きの悪いものは一日働いても半日分にされた。黍畑は住居から三里くらい離れた所にあり、皆ボギーという車に乗り、それを機械が引いていった。後で私は給仕になり、家の掃除や、ナイフを研いだりガラスを磨く仕事をした。三年の期限が来ると帰国した。おみやげは黍と砂糖であった。黍の大きさは子どもの腕くらいあり、その味の良かったことは今でも忘れられない。

帰国して直ちに稲作をしたが収穫がなかったので、夫婦でアメリカに渡った。サンフランシスコのホテルでちょっと働き、次にサクラメントで夫は野菜やホップを作る農園で働き、自分は奉公した。ホップの収穫期には毎日仕事が終わるとその農園のまわりに日本人労働者が多数集まってバクチが始まるが、それを当て込んで餅やぼた餅をしこたま作って行くと飛ぶように売れた。後に洗濯屋を開業し、その時の送金で二反六畝の里田を買った。渡米して八年で帰国し山も買った。」

(2) 堅本市助（橘町日前、1876年12月28日生、1896年渡航）²¹⁾

「農家でたばこ屋もしていた。とても貧しく七人兄弟の長男に生まれたが、他家に雇われたり、山子（木挽き）などして働いて儲けた金は全部家の生活費に取り上げられた。小学校は三年までしか行けなかった。ハワイへ行って金を儲けたいと思ってはいたが、旅費が貯まらないのでどうにもならなかったところ、大村という人が友人の村岡と私を連れ立って行ってくれることになった。船中で自炊すれば安くつくというので、河井で金を借りて久賀で柳行季と一升炊きの釜を買い、十二月に神戸から六十円で七千噸の天神丸という貨物船に乗った。大島郡人が二十七人も一緒なので寂しいとは思わなかったが、富士山が見えなくなる時はとても悲しかった。ハワイに着くと島のような所で千人小屋と呼ばれる大きな家に入れら

れ、一週間身体検査や目を調べられたり、消毒されたりしてホノルルに上陸し、久賀の人が経営している川崎旅館に泊まった。次の日からは大村という人の監督で山拓きの人夫として働いた。それがすむと甘蔗の葉むしりをした。月々十二弗五十仙もらった。監督の大村は十六弗五十仙もらった。食費が六弗八十仙かかり身の回りのものも買わなければならないので、故郷へは送金できなかった。身体が小柄で十時間労働なのでとても疲れた。何度となく帰ろうかと思ったことがある。父の病気の報せが来たので帰国し妻をもらった。六人弟妹の面倒を見る苦労も多いが、やはり生まれた所がよいと思った。ハワイへは二度と行きたくないが、アメリカへなら死ぬまで暮らすつもりで行ってもよい。」

(3) 川本正助 (大島町戸田, 1884年1月18日生, 1903年渡航)²²⁾

「私の家は呉服商であった。役場の官吏が五・六円, 小学校長が九・十円の月給の頃, ハワイ移民は砂糖作りをすると月に十二弗, 邦価にすると二十四円を得ることができるということであった。これはまさに郡長くらいの収入に相当するものである。生活費を差し引いても半分残るとして、年に五十円くらい残ることになるからハワイに行くに限ると考えた。それは私が十七歳のときである。ホノルルに到着して向こうの島の収容所に入れられた。移民局の指図に従って田舎のプランテーションに割り当てられた。ここでは月十弗くらいで生活して、あとは貯蓄して三年から五年で五百円から千円も貯めると、国に帰って田地を買ったり家を建てたりして、お金がなくなると再渡航するという手合いで、金のためなら旅の恥はかき捨てを実行していた。このみじめな移民労働者に比べて白人たちは実に立派な生活をしていた。なぜこうも違うのかと考えた私は、結局学問の有無によるものだと結論し、自分も学問しようと考えた。それにはまず英語をマスターしなければと思って、スクールボーイとなって月二弗を得つつ

やっていたが、渡米費もできたので二年半ばかりして米国へ転航した。朝二時間、午後四時間労働しながらロスアンゼルス市立のハイスクールを終え、さらに南加州大学で電気科を卒業した。その後シカゴの電灯電力会社の発電所に入り、昭和八年に帰国するまで働いた。私は腰掛的に移民することはよくないと思っている。」

(4) 今田宗一（大島町西屋代、1885年11月16日生、1906年渡航）²³⁾

「私は兄弟が多いし、小さな所へ籠るよりも海外雄飛の念に燃えた。ときに近所の山根清右衛門、河原大次郎両氏が渡米しているので行って一稼ぎしたくなった。米国へ普通の理由では渡航許可が出ないが、学術研究を理由として願い出たら許可されていたので願い出たが却下された。そこでハワイに渡って転航しようと思ったが、転航禁止になり渡米できなくなった。当時柳井に支店があった日本移民会社の仲介で結婚したばかりの妻を同伴して神戸を出帆した。ホノルルで友人の山本熊之助の所へ一・二週間滞在し、ワイパフのバイナップル会社の耕地で二年間働いた。除草や缶詰の製造に従事したが、日給は耕地で八十仙、工場では一弗、但し日曜はもらえなかった。夫婦の稼ぎで毎月二十五弗宛送金したら、日本では驚いていた。アパート式の六畳一間を無料で貸与され、ランプ生活であった。バイナップル畑では炎天下の作業なので昼飯も日陰で食べられず、その暑さに閉口し、父が止めたのになぜ来たのだろうかと思った。二年後に昇給のストライキをやって追放されホノルルに出た。家庭奉公し私は芝刈り、妻は洗濯給仕などをした。その後、大工やセメント職をやり真珠湾のドックもこしらえた。洋服屋も三年くらいした。その間土地を契約借りして家を建てた。欧州戦争時の好景気で大工は四・五弗になった。初めは素人であったが、釘さえ上手に打てれば白人は大工と見なして雇ってくれた。日本人はよく職業を変え、運のよい者は成功する。大島郡人は良く働いたの

で比較的 success した。しかし一儲けしたら帰ろうと思っていた。三十年前頃から土着永住のつもりの方が多くなった。郷里の父も老いたので子どもに跡を譲って昭和七年の暮れに帰朝したが送った金はほとんど無くなっていた。長男は大工の親方をして借家を三軒持ち、自宅もアパート式にして一部を三家族に貸している。長男と孫が自動車を一台宛持っている。次男もハワイアンパイナップル会社に勤め大工をしている。私が生きている間は時々帰ってくれば、その後はどこでもよく生活できる所へ行くように言っている。」

(5) 岩本新一 (大島町小松, 1898年12月27日生, 1915年渡航)²⁴⁾

「私の父は明治三十一年に渡航して、最初ハワイ島ハビー耕地で働き、ついでマウイ島の製糖会社機関部に勤務し、その後ホノルルに移住して写真業をした。明治四十三年にはカウアイ島に移り、製糖会社の支配人で上院議員をしていたドイツ系白人の家庭で料理人をしたが、料理がとても上手かった。私は祖父母に育てられ、小学校を卒業すると父を頼って渡航した。当初は耕地会社の店員をしたが、言葉が不自由で困り果て三か月でやめた。そこでホノルルに出て昼間は学校に通って英語などを勉強し、朝夕は白人の家庭の庭掃除や園丁の仕事をする、いわゆるスクールボーイを七・八年した。その間小松屋旅館を経営しておられた同郷の佐藤好助さんのところに置いていただき、たいへんお世話になった。大正十一年に佐藤さんは息子に跡を譲って帰国されたので、手不足になった小松屋旅館の手伝いをして支配人にもなったが、風雲急を告げる昭和十六年十一月ついに引き揚げた。

開戦後徴用され陸軍司政官として五年間南方で通訳や渉外の任務に就いた。戦後は昭和二十三年より三十一年まで、志願して岩国の英濠空輸部隊の警備課に勤め通訳の責務を遂行した。昭和十六年四月一日付で、大島町

長安元作十氏より「大島海外相談所長を委嘱する」との辞令を受け、海外在留同胞との連絡に当たることになった。主な仕事としては、ハワイの厚生年金受給資格のある帰国者のために受給手続を代行すること、海外在留者の結婚の世話をすること、海外在留者の郷里で所有している土地売却の助言をすること、海外旅行者の相談に乗ることなどである。」

4. 周防大島とカウアイ島

中国新聞社大島支局長、久行大輝氏は、周防大島とハワイ州カウアイ島の姉妹縁組が2013年で50周年の節目を迎え、明治期の官約移民に始まった交流が、両島に住む親族同士の縁を軸にした繋がりから世代交代を重ねて次第に形を変えつつあることを指摘している²⁵⁾。

「周防大島とカウアイ姉妹島縁組50年」と題する吉井勝雄氏（当時84歳）へのインタビュー記事には、「周防大島小松開作の元教員吉井氏は、カウアイ島生まれで、小学校3年生まで現地で暮らし、大島に戻った経歴の持ち主である。大島では40年間、中学校の英語教員をした。外国語指導助手に発音を褒められ、カウアイ生まれだからと胸を張った。」と紹介している。周防大島は官約移民約3,900人をハワイへ送り出した「移民の島」であるが、その後も親類や知人を頼りに渡航するケースも多く、吉井氏のような絆を持つ人は少なくなかった。そんな縁を背景に、カウアイ島と姉妹島縁組を結んだのは1963年6月であったが、以来50年間、脈々と続いてきた両島の友好関係は、世代交代が進むにつれ、次第に薄れているのも事実である。大島の住民でさえも初期の移民の苦労話を知らなくなってきた²⁶⁾。

2016年3月11日に筆者が行った吉井勝雄氏（87歳）への聞き取り調査によると、吉井氏は1928年（昭和3年）12月1日、大島郡小松町出身の父吉井徳助、母タネの6男として生まれた。父母は、1907年（明治40年）12月

25日、ホノルルに到着しカウアイ島アナホラに在住した。父はパイナップル会社に監督として勤務した²⁷⁾。小学校時代、午前中は現地校に通い、午後は日本語学校に通っていた。言語的な困難を感じたことはなく、英語も自然に使用することができた。自然に自生する植物の実を取ったり、父親や兄たちは海で魚釣りをしたりする生活で、年中温暖で住みやすいところであった。吉井氏が日本に帰国したのは、伯父吉井甚右衛門に子どもがなかったため、その養子となるためであった。養父母は吉井氏を可愛がってくれたが、もし産後が悪く亡くなった実母タネが生きていれば、養子に行くこともなくカウアイ島で暮らしたのではないか。その後兄たちは亡くなり、カウアイ島に一度も戻らず薄れていく縁に寂しさを感じると語った。

また久行氏は、姉妹島縁組50周年記念「町、証言ビデオ収録」と題する記事で、周防大島町西屋代の日本ハワイ移民資料館で福田豊氏（当時96歳）がビデオ撮影に応じて、移民を体験した世代が島内からほとんどいなくなる状況の中、当時を知る人たちの肉声を残す最後のチャンスとして町が手掛ける「ハワイ移民ゆかりの人々の証言ビデオ」の収録に協力されたことを紹介している。福田豊氏は父親が渡ったハワイで1917年に生まれ、オアフ島ホノルルで同級生とよく遊んでいたことや、8歳で周防大島に帰郷した時は、髪を伸ばして洋服を着ていたため、近所の子どもにからかわれた記憶等について、周防大島町役場政策企画課の山本勲氏のインタビューに約30分間応じて語った。「若い人に伝えたいことは」という問い掛けに、「戦争だけはやってはいけない」と語気を強めた。周防大島町役場は、ハワイ生まれで周防大島に戻った小林アツ子氏（当時95歳）の証言も収録したが、「移民の歴史を知る人がほとんどいなくなり、肉声を残す時間的余裕もなくなっている。一人でも多くの人に協力してもらいたい。」と訴えている。収録した証言は地元ケーブルテレビで放映されるほか、DVD化して町内の図書館にも置く予定である²⁸⁾。

5. おわりに

周防大島は瀬戸内海で3番目に大きい島である。大島大橋を渡ると山陽線大島駅であり交通の便がよい。大島は明治時代にハワイへ労働力として多くの島民を移民として送り込んだ縁で、1963年6月、ハワイ州、カウアイ島と姉妹縁組を結んでいる。1885年2月8日、第1回官約移民944人が東京市号でホノルル港に到着したが、その3分の1に当たる305人が大島郡出身者たちで占められていた。ハワイに上陸した移民たちは、ハワイ諸島各島に点在するサトウキビ農園に振り分けられ、監督官の監視のもと、男たちはケーンナイフでサトウキビをひたすら刈り取り、女たちは刈り取られたサトウキビの枯れ葉を手で剥がすきつい作業を行った。炎天下のその苦役は「ホレホレ」と呼ばれ、辛い仕事や生活の様子、故郷への郷愁といった思いを即興的に歌い込んでいったものを「ホレホレ節」という。その一見シンプルな歌詞から逆に移民たちの心の奥底に潜む複雑な心情に想いを馳せることができる。

ハワイへ渡った移民の生活は一般化されそれぞれ違いがないかのように固定観念で語られがちであるが、移住の動機、生活状況、給金、借金の返済や送金、故郷への郷愁、帰国の理由等、それぞれ個人差が大きい。また移住した時期により、労働環境や暮らし向きについても変化が見られる。例として挙げた移民の実話から、その多くの場合、貧しい島の生活から高額な収入への期待が移住の主な動機となったこと、また親類や知人など誰かしら頼ることができる人物が既にハワイに在住していたこと、居住環境の貧しさ、監督官の監視のもとでの労働の厳しさ、労働環境が劣悪であった点では共通していることが分かる。一方、預貯金や送金ができたかどうかについては人それぞれであったようである。20世紀に入るとより豊かな生活実現のため、教育を志向する者が少なからずあったことは特筆すべき

点である。帰国の理由については、家族や本人の高齢化や、戦争の開始が帰国を促したことが分かる。

最後に、吉井勝雄氏のメッセージからは、高齢化によりカウアイ島在住当時の記憶が薄れつつあり、同様に両島の兄弟姉妹との絆が途切れつつあることが懸念されるが、周防大島に都会から移住してくる人々が目立つようになった昨今、その移住者たちがもたらす新風によって、島の文化が変化していくように、カウアイ島においても、周防大島と同じように新しく何か生まれつつあることが予測される。今変化しつつある文化が後に振り返ってみると伝統となっていくのである。重要であるのは、周防大島が移民を送り出した歴史を記録に残し、後世の人々に伝えていく努力をすることであるように考える。先に述べた日本ハワイ移民資料館のような施設が今後果たす役割は大きい。

注

- 1) 『くるとん』特集周防大島, Vol.45, 2015 Summer, 3頁。
- 2) 宮本常一は、1907年8月1日、山口県大島郡家室西方村に生まれ、大阪府天王寺師範学校（現大阪教育大学）専攻科を卒業した。学生時代に柳田國男の研究に関心を示し、その後渋沢敬三に見込まれて本格的に民俗学の研究を行うようになった。1930年代から1981年1月30日に亡くなるまで、生涯にわたり日本各地をフィールド・ワークし続け膨大な記録を残した。宮本の民俗学は非常に幅が広く、中でも生活用具や技術に関心を寄せ、民具学という新たな研究領域を築いた。宮本は柳田國男とは異なり、漂泊民や被差別民などの問題を重視したため、柳田の学閥からは冷遇されたが、20世紀末になって再評価されるようになった。柳田民俗学が個や物や地域性を出発点にしつつも、それらを捨象して日本全体に普遍化しようとする傾向が強かったのに対し、宮本は自身も柳田民俗学から出発しつつも、渋沢から学んだ民具という視点、文献史学の方法論を取り入れることで、柳田民俗学を乗り越えようとしたことが評価される。「宮本常一」wikipedia, 2016年3月22日検索。
- 3) 宮本常一（2002）『父母の記／自伝抄』宮本常一著作集42, 未來社,

- 11-12頁。
- 4) 前掲書, 12-13頁。
 - 5) 前掲書, 13-14頁。
 - 6) 宮本常一(1997)『周防大島民俗誌』宮本常一著作集40, 未來社, 16頁。
 - 7) 大島町役場編(1994)『周防大島誌』(復刻版)ぎょうせい, 921-923頁。
 - 8) 前掲書, 911-912頁。
 - 9) 堀雅昭(2007)『ハワイに渡った海賊たち』弦書房, 55-59頁。
 - 10) 「ハワイ移民の唄・ホレホレ節」『くるとん』特集周防大島, Vol.45, 2015 Summer, 47頁。
 - 11) 前掲, 48頁。
 - 12) ホレホレ節は, ハワイの日本人一世が生み出した労働歌である。19世紀末に日本人労働移民が組織的にハワイに送り込まれ, ハワイ各地の砂糖耕地で重労働に就いた。ホレホレ節は, その砂糖耕地での労働の中から生まれてきた民謡である。「ホレホレ」とは, サトウキビの枯れ葉を手作業で掻き落としていく作業を指す。他の耕地労働に比べ比較的力がいらなかったため, 主に女性の仕事であった。炎天下での「ホレホレ」の作業の中で, ともに励まし合い, 力を合わせるために, また少しでも気持ちを紛らわせるために, 即興的にいろいろな歌詞をつけて歌い込んでいったものと思われる。ホレホレ節は, おそらく日本人移民が生み出した唯一の, 本当の意味での民謡であろう。本当の意味でというのは, 人々の間で歌い継がれてきた共同体の歌であって, 特定の作詞者も作曲者もないからである。歌詞の内容は, 砂糖耕地での生活, 男女関係, 賭博, 今後の身の振り方についての思案, 故郷への思い等, 当時の移民の生活に密着したものである。ハワイの日本人移民の言語環境を反映して, 日本語, ハワイ語, 英語が入り混じった歌詞になっている。<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/folksong/multiculture/009.html>
 - 13) 土井彌太郎(1980)『ハワイ移民史』マツノ書店, 134頁。
 - 14) 日本ハワイ移民資料館提供
〒742-2103 山口県大島郡周防大島西屋代2144番地
電話・ファックス: 0820-74-4082
Eメール: hawaii@sea.inc-tv.ne.jp
開館: 9:30~16:30(月曜日および年末年始を除く)
 - 15) 前掲, 注14)に同じ。
 - 16) 平篤志, 野田淳, 光田淳二, チョグジルト「山口県周防大島における海外移民の特徴と観光地域づくり」『地理学研究』第56号, 2007年11月,

27-28頁。

- 17) 前掲, 注10) 50頁。
- 18) 前掲書, 注13) 127-129頁。
- 19) 前掲書, 注13) 108-126頁。
- 20) 前掲書, 注13) 114-115頁。
- 21) 前掲書, 注13) 116-117頁。
- 22) 前掲書, 注13) 120-121頁。
- 23) 前掲書, 注13) 123頁。
- 24) 前掲書, 注13) 125-126頁。
- 25) 久行大輝「周防大島のハワイ移民」①～⑤, 『中國新聞』2013年10月29日～11月2日。
「周防大島とカウアイ姉妹島縁組50年」上・中・下, 『中國新聞』2013年10月3日～10月5日。
- 26) 久行大輝「周防大島とカウアイ姉妹島縁組50年」上, 『中國新聞』2013年10月3日。
- 27) 布哇浄土宗教團(1934) *Jodo Mission of Hawaii* 布哇浄土宗教團本部発行, 475頁。
- 28) 久行大輝「姉妹島縁組50周年記念 町, 証言ビデオ収録」『中國新聞』2013年6月15日。